

1945年（昭和20年）6月17日鹿児島大空襲

北区・上町支部
(たにもと耳鼻咽喉科・外科クリニック) 相良 有一

今年も6月17日が巡ってきた。

私は鮮明にその夜の事を記憶している。昭和20年、私は小学校2年生であった。兄弟姉妹がおおくて、7歳の私は手足まといになり、5年生の姉と二人だけ親戚の疎開先に預けられた。鹿児島から北西へ約15~16km離れた吉田町西佐多である。

6月17日深夜（11時ごろ）叔母に起こされた。「鹿児島が大火事だ」と。鹿児島の方向の山際がまっかにそまっていた。両親、姉妹の6人は鹿児島市内に住んでいた。安否は全く分からなかった。みんな無事だったと後日判明。当日心配した記憶はない。私の経験はそれだけのことである。

大学に入学してから聞いたところでは、その日高麗町にすんでいた友人は大変な体験をしたと話していた。側溝づたいに火を逃れ甲突川へ避難したという。

今年の6月17日付けの南日本新聞南風録の記事によると、その日の空襲で鹿児島市街地の44%が破壊され、死者約2,300人、負傷者約3,500人という。その記事で特に印象に残ったのは当時西駅（現在の鹿児島中央駅）の近くにあった鹿児島市立女子興業学校（現在の鹿児島女子高校）の教務日誌が見つかったという内容である。現在は共研公園になっている。丁寧な文字で克明に記録してある。NNKでも取り上げていた。寄宿舎にいた13人の生徒が焼け死んだという。教え子たちの遺体を自分たちの手で火葬したことが記されているという。「噫無念無常」と記してある。当日の様子をありのまま克明に記してあるのは、

最高の歴史的資料と思う。

6月17日朝職場の朝礼で南風録の内容を話した。職員の反応が今一つという感じだった。なぜだろう？と考えた。終戦後76年たっている。やむをえないのか。昭和20年を起点に現在まですでに76年経過している。西南戦争は昭和20年より69年前の話である。遠い遠い昔の話と思っていたが、昭和20年から今日までの方がさらに7年ながい月日が流れている。だが女子興業学校の教務日誌のような資料をもとに当時の状況を学び、そんな悲惨な体験をすることのないような社会を作っていくなければならないと思う。

